

五稜郭記錄

五稜郭記録

五稜郭ハ函館市街地ヲ離ル一里餘。安政二年函館奉行竹内保徳、堀利照、等之ヲ畫シ翌三年諸術教授武田斐三郎ヲ工事擔當者ト爲シ大ニ土木ノ工ヲ起ス。元治元年工完ク成リ全年六月奉行小出秀實移リテ。茲ニ事ヲ謀ル郭ノ周圍ニ濠ヲ繞ラシ龜田川ノ水ヲ引テ之ニ注グ。又特ニ濠外東西南ノ三面ニ土壘ヲ設ケアリ。

郭内周圍千九百間、高サ一丈五尺、直徑百八十間、地積五

萬四千百二十二坪、又縦横水道ヲ設ケ飲料ニ供ス。郭ノ周
圍ニ三門アリ北ニ一、東北ニ一、西南ニ一、而シテ西南ニ
於ケルヲ追手門ト稱ス、追手門外ニ三角土壘ヲ設ケ内郭ヲ
隔遮シ其ノ左右ニ二ノ小濠ヲ鑿テテ大濠ニ通ゼシム。五橋
アリ、正北門前ニ一東北門前ニ一。又追手門前ニ一。其左右
ニ二、明治元年五月一日幕府函館奉行杉浦誠ヲ以テ之ヲ官
軍ニ致ス、官軍參謀井上石見等之ガ收受役タリ、又此月函
館裁判所ヲ茲ニ置ケリ、全年十月徳川脱走ノ徒陷テ之ニ據
ル。二年事平グニ及ンデ開拓使ノ所管ニ移リ六年十二月陸

軍省ノ所管トナル。

自之先キ明治五年五月建築物ノ總テヲ開拓使ノ毀ツ所トナ
リ爲メニ今ハ只空郭ヲ止ムルニ過ギズ明治三十年函館重砲
兵隊ノ兵營ヲ此處ニ假設シタリシガ翌三十一年十二月千代
ヶ岱ニ移ス。

五稜郭創置年費取調顛末

五稜郭ノ創置其年月日不詳本使吏科ノ前記ニ一元治元年函
館奉行小出大和守築之」ト書シ松浦武四郎編蝦夷年代記ニ

「安政六年あんせいねん土工ここうヲ起シおこ文久三年ぶんきゅうねん五稜郭りようくわく成ル」ト記録ス。

當時函館奉行ノ書冊散逸シテてう徴スベキモノナク、會々其事たま／＼そのこと

ニ關涉セシ者ノ一二傳つたフル所ノ圖書ニ據ルニ多クハ此役ト

砲臺トノ事ヲ相混ジテ其始終ヲ詳悉スル能ハズ、蓋砲臺ハ

安政三年ヨリシ、五稜郭ハ五年ノ頃ヨリ土工ヲ興セシモノ

ナラン。

當初函館奉行竹内下總守、堀織部正函館近傍ノ地形及沿海

防禦ノ事ヲ論ジ、安政元年十二月九日客老阿部伊勢守ニ申

請スル所アリ、其趣旨矢不來ありかわら（有川茂邊地兩村ノ臺場）押付

函館地先ノ臺場(辨天上(灣中ノ臺場)辨天岬(港内市中ヲ圍
ムノ出岬)立待岬(函館外洋第部沙首岬ト遙ニ對ス)築島港
内中央ニ突出ス)等ノ砲臺新築模様換、函館、龜田ノ中間千
代ヶ岱へ本陣屋敷取建テ、龜田ノ奥鍛治村中央ノ平原ニ役
宅ヲ移サントスル等ノ建議ナリキ、翌年五月ニ至リ巨萬ノ
費額一時辨ズベキニ在ラザレバ辨天岬、築島ノ要地ヨリ着
手シ其他ハ連年築造スルノ見込ヲ以テ、其費用取調可相
伺旨ノ指令アリ、是年十二月兩砲臺築造ノ費額取調積ヲ冒
シテ着手スベキヲ伺フ(五稜郭ノコト見エズ)

このとき、係官員モ命ゼシモノナラン、其後年月日不詳、終年
月割下金渡ノ事ヲ指令スルトモ、其豫算ト仕様書ヲ存セザ
レバ其額モ亦不詳○

安政三年十一月係官員申渡ノ上申書アリ（人民名下ニ出

ツ）此書亦砲臺ニ此役ト併記セリ、又安政五年四月砲臺並ニ

龜田役所役宅向建築費額ノ内貳萬兩ヲ請求セシ申牒ニ、別

テ當年ハ辨天岬、臺場、龜田、五稜郭、總堀々割土壘建築方

共大勢ノ人夫相係リ云々ト、有リ世ノ説ク所此手ノ土工是

歳ヲ以テ特ニ盛トス、其使役スル處ノ人夫一日六千ニ下ラ

ズ由これによつてこれをみるにけだしほうだい此觀之蓋砲臺ハ二年ヨリ着手シ、工事稍成リシヲ以

テ五年ヨリ此役ヲ興セシモノナルヘシ。此役ニ關セシ木使

九等屬小山節三當時又藏説ク所ニ據レバ辨天、築島ノ兩砲

臺並ニ五稜郭外堀土壘共總計金四拾萬圓ヲ貳拾ケニ頒賦シ

内拾萬圓ヲ辨天砲臺ニ、壹萬五千圓ヲ奉行役所所宅ニ、八

萬圓ヲ五稜郭周圍ノ堀割所謂外濠ノ分トアセリ、内隍ノ堀

割共芝塊ヲ以テ土砂石掩ニ石垣ヲ築カサル見込、本壘、石

垣、土壘、馬出壘、築造等ノ費ニ充シム（築島臺ニ充ル費

詳ナラズ）而シテ内隍、外濠ノ堀割稍成ルニ及ンテ土砂潰

類シ以テ土地ノ掩フヘキニ非サルニ依リ、更ニ前議ヲ翻シ
石垣築成ノ事ニ變更シ、費別ニ依ラサルコト、セリ、尋テ
築直シ等ノ事アリテ當初謀ル處意外ノ冗費數多ナルヲ以テ
到底八萬圓ニテハ支辨スルコト能ズシテ僅ニ其成功セシ所
周圍ノ堀割(巾九丈九尺長延千八百九拾九間四分トス、下交
石垣長延ニ比スレハ壹分ノ差アリ)ノ外手先ノ長斜坂ト馬
出壘堀巾土間、外濠ノ石垣馬出堀共内側外側併テ長延千八
百九拾九間三分トス、圖面ニヨリ直徑大約百八拾間ト看做
ス、五方面併テ九百間トナス。大約本文ノ等數ニ適フ、大手

前ノ底壘其高キ七尺二寸六分其低キ五尺九寸四分（内陸、巾
二丈一尺八寸深九尺九寸、本壘、石垣、等五分ノ一ニ過ギス
其遺ス處ノ四分ハ逐年ヲ竣テ補成センコトヲ期シ、終ニ六
七年シテ竣成ニハ至ラサリキ。

當初測定其堀内ノ總坪ハ四萬四千七百三十坪餘トス、其壘
内ノ建物奉行役所役宅（當所ノ圖面ニ據レハ大凡九百二十
一坪トス）新築費額壹萬五千圓、支砲向役宅並ニ官庫倉廩
汲井等ノ費ヲ詳ニセス（安政五年建築費額請求申牒ニハ其
總額金四拾壹萬八千七百六拾壹圓トス）。追テ請求増額シテ

該費ニ充テシモノナルベシ、該地ハ龜田ト鍛冶ト兩村入會
ニシテ無限平原曠野ナリシヲ函館奉行支配諸術調所教授
役武田斐三郎ノ繩張セシト云フ、又此役ニ關セシ吏官逐年
ノ轉換増減アルヘケレトモ安政三年十一月ノ上申書ニ據リ
左ニ氏名ヲ掲ク

組頭

河津三郎太郎

是歲十二月増員

三田喜六

諸術調所教授役

武田斐三郎

全

神保忠左衛門

同心組頭どうしんくみがしら

調役並しらべ やくならびに

全下役取締ぜんげたくしりしまり

全下役ぜんげたく

安政四年五月(神保)ニ代ルあんせいねんげつみほにかわる

是歲十一月増員このとしげつぞうめん

全ぜん

總計十二名そうけいじふにまい

代島剛平しろしまこうへい

大河内八太郎おほがほうちやへちやう

鈴木木孫四郎すずきまごしやう

山顯之進やまけんしん

宇都木頼母うづきたのちも

板倉庄次郎いたぐらしょうじやう

小川又藏こがわまたぞう

外川作藏とがわさくぞう

該郭落成ニ至ラスト雖トモ、官廳ヲ開キ事務ヲ取扱ヒシハ
元治元年六月十五日ノ事ナリ。

當時此事ニ關セシ者ノ說所歷々所アル由、此觀上本使科前
記ノ說疑フベカラス、松浦氏ノ說恐ラクハ訛ナラン、内外
ノ堀割ハ越後ノ國ヨリ松川辨之助、石工ハ備前ノ國ヨリ井
上喜三郎(今ノ喜三郎ノ亡父)ナリ人夫ヲ率テ各々其職ニ從
事ス大工ハ當時小普請方ト稱スル中川伊兵衛ナルモノ江戸
ヨリ來リテ負擔ス、木材ハ羽後國能代ヨリ購求シ松、杉、栗
ノ三種ヲ用ユ、又石垣根入ノ砂利ハ函館ノ寒川附近ヨリ石

材ハ函館山水元(今ノ水道配水池)附近ヨリ斫出シ、腮石ニ
使用ノ石材ハ攝津、備前御影石ヲ使用シアリ此石材ハ運費
共一坪ニ付金五圓拾貳錢五厘ノ約束ニテ、大阪ヨリ取寄せ
シガ經費ノ都合ニテ參拾五錢ヲ値引キセシト云フ。
函館區ノ發展ニ伴ヒ大正二年函館區ニ於テ陸軍省ヨリ借受
ケ遊覽地トナセリ。
郭内樹木茂リ清楚幽邃ノ氣ニ滿チ杖ヲ引ク者絶ユルヲナシ
冬季外濠溝ノ水ヲ以テ作ルハ函館氷(又ハ龍門氷)ニシテ其
名聲世上ニ喧傳セラル。

大正十一年七月廿八日印刷
大正十一年八月十一日發行
昭和二年四月十五日第三版
昭和二年八月三十日第四版
昭和四年四月二十日第五版
昭和五年八月十五日第五版

定價拾錢

函館市五稜郭番外地

識者
兼發行者
北島勇之進

函館市東雲町二八一番地

印刷人
庄司保治郎

函館市東雲町二八一番地

印刷所
龍文堂印刷所